

# 異分野をつなぐ対話空間を

## 環境・社会理工学院 融合理工学系 野原 佳代子 研究室

野原 佳代子 教授 1990年学習院大学人文科学研究科修士課程修了。1992年オックスフォード大学歴史学修士号取得、1998年同大学翻訳理論学博士号取得。KU Leuven(ベルギー)研究員を経て、2004年に東京工業大学社会理工学研究科人間行動システム専攻に着任。2016年、改組により同大学環境・社会理工学院 融合理工学系教授。



それぞれの専門分野の垣根を超えた交わりがイノベーションに必要なってくる時代。分野の壁を越え、どうやったら相手の言っていることを理解し、自分の言いたいことを相手に分かるように伝えるか。人のコミュニケーションから見えてくる世界とは何なのだろうか。

### 翻訳学とは？

翻訳と言って思い浮かべるのは、どういうものだろうか？英語の邦訳や同時通訳の人が外国人の方のインタビューを瞬時に日本語に直している風景などであろうか。しかし、それだけが翻訳ではないと野原先生はいう。例えば、科学に関する難しいことを、子ども新聞向けに分かりやすく書き換えることも翻訳である。一般に翻訳は、学問上大きく3つに分けられるという。言語間翻訳、言語内翻訳、記号間翻訳だ。

よく聞く翻訳にあたるのは、言語間翻訳で、その言葉の通り、異なる言語の間での翻訳である。しかし、翻訳は、同じ言語内でも行われる。それが、言語内翻訳だ。例えば、大阪方言から標準語、工学の研究者が使う言葉から一般の人が使う言葉に置き換えるといった場合である。先の子ども新聞の例も、その一つだ。3つ目の記号間翻訳とは、媒体が異なるものの間で、情報を表現し直す翻訳

のことを言う。例えば、言語と画像、映画と文学、音楽とスコアブックなどといった記号間の行き来や、漫画原作の映画や小説などのことである。こう見ていくと、ものを表現し直すということのほとんどが翻訳と言える。

そして、注意すべきことがある。これら3つの翻訳形式は独立ではなく、重なり合っているということである。これについて、具体例とともに見ていこう。

たとえば、ある海外小説があり、それが映画化されたとする。表現媒体が小説から映画に変換されているため、この場合記号間翻訳と言えるだろう。しかし同時に、英語の小説から英語の映画に変換されたのであれば、言語内翻訳であるとも言えることができる。さらに、その映画の日本語吹き替え版が制作されたなら、それは言語間翻訳になる。一つの出来事でも、そこには様々な翻訳が行われており、3種類の翻訳は、重なっているのだ。単純な言語間の翻訳だけではないものも、翻訳と

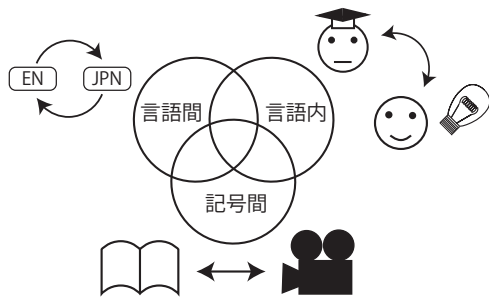


図1 3種類の翻訳の関係性

見なせることが分かったであろう。(図1)

それらを扱う翻訳学の使命は、対象となる翻訳がどのように行なわれているのかを明らかにしていくことである。すなわち、記号・媒体や言語を変えて伝えるとはどういうことなのか、人々の間で行なわれるコミュニケーションにおいて、どういふところに翻訳が現れるか、また、どんな影響を及ぼしているのか、そんな問いに立ちむかうということである。

実は、翻訳学という学問分野は、日本ではあまり研究されていない分野の一つである。さて、どのように野原先生は、翻訳学に出会ったのだろうか。

### 翻訳学に出会ったきっかけ

野原先生は、修士時代から博士時代まで、イギリスに留学していた。修士時代の指導教官から、外に出ないとダメだと言われたのがきっかけで、外に出て視野を広げることにしたという。留学前までは、古典における、日本語の研究をしており、日本語とは何かを探求するために、近世の日本語を主に扱っていた。そこから興味は日本語の中でも現代語の方に写り、留学先のイギリスでは、比較・比べることによって日本語のことが良くわかるのではないかと思います、日本語と英語の対照研究をしようと思った。どうやって研究しようかを考えた時に、まずは、いろいろな分野・理論に出会って、そこから決めようと、様々な授業に出た。そこで出会った分野で論文を書いてみる。しかし、うまくいかず、立ち止まる。このような日々を繰り返し、最終的に翻訳にたどり着いたという。

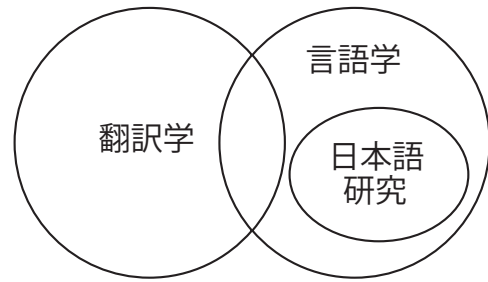


図2 言語学と翻訳学の関係性

ここで、言語学と日本語研究と言われる分野と翻訳学の3つの関係性について整理しておこう。言語学と翻訳学は重なっている部分もあるが、翻訳学は、言語以外に文化的・歴史的背景など別のファクターが入るので、言語学に内包されることはない。一方で、先生が修士時代に行っていた日本語の文献を読んで、その解釈や理論を構築するなどの日本語研究は、言語学の一つの分野である。ここからも分かるように、先生は、言語学から翻訳学に完全に移ったというよりも、専門領域を拡大していったのだ。(図2)

日本では翻訳を専門にする研究者がほとんどいなかったものの、先生は独自に翻訳理論に関する知見を深めていた。ただ、日本で翻訳を専門に研究をしている人がほとんどいなかった。しかし、就職先がないのを覚悟で、翻訳でやると押し切った。

イギリスで博論を書き終わり、しばらく日本で研究を続け、その後ベルギーでポスドクとして活動するようになった。ベルギーでの生活が大きな分岐点であると、野原先生はいう。そもそも、日本で翻訳理論を扱っている場所がなく、安定的な仕事はなく、ポストにつけないと言われていた。海外に行くことを止められたが、自分の勘に従い、ベルギーへ。翻訳学の大家であるランベール(J. Lambert)のもと、研究の手伝いをしながら、ポスドクとして、文献を読みあさり、自分の翻訳理論に関する知見を深めていった。そんなとき、東工大の公募が出た。もともと東工大とは縁もゆかりもなかったが、公募に受かり、日本に戻る機会を得た。

先生は東工大に来て、研究内容が大きく変化し

たという。今までの研究とは一見異なる、サイエンスコミュニケーションを対象とした研究をメインにするようになった。サイエンスコミュニケーションとは、広義には、異分野間のコミュニケーションのことである。例えば、科学技術の必要性を一般の方に訴えたり、異なる分野の研究者間で分かり合えるようにその人に合った形で説明し直したりすることを指す。翻訳をこのサイエンスコミュニケーションという分野に適用できると野原先生は考えた。つまり、その人にとっての言語に捉え直してコミュニケーションをすることが、まさに翻訳そのものだったのだ。実際のコミュニケーションは、説明するだけではなく、双方向の情報のやり取りがないと意味がない。科学技術の一般の人とのシェアを翻訳という視点から考えられることを東工大に来てから知り、そこから急に研究に幅が出てきたと、野原先生はいう。

## 様々な人が集まるプラットフォームを

東工大に移り、先生は翻訳学を応用してサイエンスコミュニケーションに関する活動をし始めた。そこから、2009年に研究教育プロジェクトとしてCreative Flowをスタートさせた。これは、プラットフォームであると、野原先生はいう。研究やイベント・授業・人の出会い、それら全てがつながる場だ。まず、デザイン会社をお願いして、いろいろな場の創設活動を始めた。

この一環である、クリエイティブカフェを紹介しよう。これは、2009年から始まった、東工大生と一般の人を混ぜて、お茶を飲みながら、話をするという場である。サイエンスとアートの両面から対話がなされるようにしたという。例として、音楽療法というテーマで行なったときのことを紹介する。本当に鬱病に対して科学的に効果があるのかを話し合ったり、実際にその場でピアノを弾いてみたりもしたという。サイエンスの側面とアートの側面の両面をうまく織り交ぜた場を実現した。

そこでは色々な話が出て、面白い場になったが、出口がなかったと野原先生はいう。今まで意識していない視点を持ち込んで、物事を語ることは、とても大切で、それだけで一人人間として完結す



写真 東工大ー武蔵野美大合同ワークショップの様子

2018年の2月・3月にかけてVISA社協賛の、武蔵美との合同ワークショップを5日間行なった。上は、チームでの話し合いの様子。

るクオリティーではないかと思っていたときもあったが、いつしか、話すだけならだれでもできるのではないか、その先があっても良いのではないかと思うようになった。成果物を参加者で作っていく必要があると考えた。そこから、武蔵野美術大学（以下、武蔵美）との合同ワークショップにつながった。（写真）

この合同ワークショップは、コンセプトデザインという名前で開かれている。これは、あるお題に対して、話し合いをしてコンセプトを作り、そのコンセプトを、最終的に何らかの造形物として発表するものである。ワークショップの合間合間、色々なバックグラウンドの専門家が、ものの見方など新たな視点を学生に提供する。それらを、どう活かすかは、学生に委ねられる。

お題は多種多様で、双方の先生方が、集まって案を出しまくるのだそうだ。そこから、お題の難易度や最終的に画一化してしまわないかなど検討を重ね、最終的に、それが面白いかどうかでお題を決める。もう一つ意識するのは、どちらか一方の有利にならないようにすることである。

そのようにして決まったお題は、実に様々。「いつか行ってみたい場所」、「くりかえす」、「大人と子供をつなぐもの」や「思いが伝わるラブレター」などが過去のお題の例である。最近のお題だと、「恋」だった。

このようなワークショップを通して、先生は実際の現場におけるコミュニケーションを分析し、読み解いていく研究を進めている。これ以外にも、

文献を読み解いていくという地道な作業を通して研究していくこともある。次の章から、具体的な研究の中身について詳しく見ていこう。

## 具体的な研究の中身

まず、一般的に研究の流れとして二つの軸がある。「規範的」と「記述的」である。「規範的」とは、ものごとがどうあるべきかということを問題にするというようなべきだ論ともいえるような研究のことを言う。一方で、「記述的」とは、何かものごとが起こったときに、それがどのようなメカニズムで起こっているのか、それがどうなっているのかというように、ものごとの本質を理解しようと試みる。

野原先生は、後者の研究の在り方をとっている。つまり、何らかの翻訳が起こったときに、それがどうなっているのか、どうして起こったのかを突き詰めて考えていくのだ。

実際にどのように研究を行っているのかを見ていこう。コンセプトデザインを基にした研究を紹介する。まず、授業でなされる会話を録音・録画する。そのデータを文字に起こす。そして、仮説をたてる。例えば、武蔵美生の方がよく言い間違えをする、や、逆にこういうやり取りが東工大生と武蔵美生との間で繰り返されているなどの仮説を立てる。次に、それに当てはまるものを文字に起こしたデータからピックアップしてくる。そのデータをタグと呼ぶ。それらのタグから、どういう法則性があるのかなどを検討して、実際に仮説は正しいのか、また、どんな法則を見出せるのかを最終的に考えていく。

仮説を立てるとき、どのようなことを基にして、仮説を考えているのだろうか。主に2種類あると野原先生はいう。

まずは、先生自身の経験を基にしたものだ。先生は、普段から自分がコミュニケーションする際、あの人にはどのように、自分が言ったことが聞こえているかを考えてコミュニケーションをとっているという。同じ言葉でも、自分が言ったときと相手が言ったときのニュアンスは少し違う。そのズレがどこまでズレているのか、どうして生まれ

るのかなどを見ることがあるという。武蔵美の先生と打ち合わせをする中で、どのようなコミュニケーションが一番良いのかを経験的につかんで、仮説を立てることもあるという。

もう一つ仮説を立てる際に意識していることは、もともと分かっている翻訳理論の法則を応用するというものである。ここで重要なことは、一見異なると思える物事でも、実は見方によっては、同じように扱えるということがあるということだ。

その法則の一つを紹介しよう。明示の法則というものがある。人は翻訳するとき、必ず、より分かりやすくしようとするというものである。天ぷらを英語で説明するとき、「油で揚げた料理」というだけでなく、材料である野菜やエビなど様々なものを余計に付け足して説明しまう。つまり、翻訳すると、より物事が明示化されていくことがある。これを応用して考えると、自分があまり理解していないことを英語で説明しようとしたときに、その物事を理解できていないことが、英語に翻訳されようとする時点で、露呈してしまうということにつながる。

このように、経験的に得たものと既存の法則の応用でもって仮説をたて、コミュニケーションを見ていくのだ。

先生にはもう一つの研究スタイルがある。日本語と英語の文献を読んでいき、翻訳理論について研究する。実際に何を研究しているのか。まず、英語が原文であるとする、それをまず、日本語にする。そして、その日本語をもとに英語に翻訳し直す。その英語が、元の原文とどのように異なっているのかを検討する。その逆もしかり。

最新の先生の研究は、一味違ったコミュニケーションの分野と言えるかもしれない。それは、介護と医療におけるコミュニケーションである。例えば、医者は、患者が何の病気か分からず不安になっているときに、患者のためになるようなことを上手く言うことができない。何故なら、医者は、何かしらの確証がないかぎり病名をはっきりと伝えることはできない。もし患者が自分が今何の病気で苦しんでいるのか知りたくても、はっきりとその兆候が出ていなければ、医者はその病名を告げることはできないのだ。だからこそ、コミュニ



ケーションの破綻が起きていると野原先生はいう。このような現場は、今までブラックボックスであった。とてもパーソナルな部分が多いからだ。しかし、最近になって、医者がこのことを問題として捉え、現場で行なわれる生の言葉のやり取りを研究に使っても良いと、徐々に寛容になってきた。そこで、先生は、医療や介護の現場で行われるコミュニケーションを録画・録音し、コンセプトデザインで行なったように、どこで会話が破綻しているかを見ていく。それが、どういうメカニズムで起こるのかを仮説を立てながら、検証していくのだ。

最初に、翻訳が3種類あるという話をしたが、最近になって先生は、その中の記号間翻訳を本格的に研究し始めようとしている。ロンドン芸術大学CSM (Central Saint Martins) の先生とともに新しいプロジェクトを始動し始めている。その名も、Deep Mode(仮)。サイエンス/テクノロジーとアート/デザインの間の、記号間の翻訳を今までのやってきた研究をより発展させ、新たな考え方を生み出していこうとしている。

## 翻訳の面白さ

先生は、イギリスの博士課程で、翻訳の対照研究の題材に、大衆文学を選んだ。大衆文学とは、推理小説やロマンス小説など、読みやすく、どんどん先にいってしまうようなもので、深い純文学というより、ストーリーが面白いものである。これらは、英語から日本語が沢山出ており、それをたくさん集めて、ズレを見た。ふつう、日本語訳されている本を読んでいるとき、ここが原本と違っているかなど考えて読まないだろう。しかし、実際は結構違っていることが多かったという。ある意味、読者は騙されていると思うほどであったという。ここは、日本語だからこそ、こういう表現になっているのだという風に見ていく、それが悪い翻訳ではなく、そういうものとして認めていく。このズレを見ていくことが面白いという。

例えば、ズレはこんなところに出てくる。「まさか」という表現は、日本語でよく出てくる表現で、「そんなはずはない」と言うときに副詞である。ア

ガサ・クリスティーの推理小説で「That's impossible.」と出てくると、直接的に訳すと「そんなの不可能だ」となるのを、「まさか」と訳しているときがある。英語表現は、副詞じゃないけれども、対応関係はある。しかし、「そんなの不可能だ」と訳すこともできる。しかし、日常的に「不可能だ」とはあまり言わない。すなわち、日常的な言語使用のレベルでいうと、「不可能だ」ではズレていることになる。しかし、厳密にimpossibleとの対応関係でもって見ると、「不可能だ」で問題はない。

もう一つ、英語「Oh my god.」で考えてみよう。西洋の方が、驚いたときによく言うものだ。これを、日本語だとどう訳しているか。文学の中では、「あらびっくり」、「おお神よ」、中には、「仏様」、「南無阿弥陀仏」などもあるそう。ここで問題なのは、神様と仏様の違いである。それ以上に、驚いたときに「ああ、仏様」と言う日本人がいるのだろうか。しかし、そう訳して良いという翻訳文化がある。普通の日本語としては違う、しかし、翻訳の言葉の世界では問題ないという。このように見ていくと、必ず原文とのズレが出てくる。これを先生は、3rd languageと呼ぶ。そういう意味で、日本語は日常生活で言わないような「翻訳日本語」が、他の国に比べてとても多いという。この異常さがとても面白いのだ。そして、3rd languageとしての日本語が、出回っており、それが日本の読者に受け入れられているという事実も面白いという。読み替えることで生まれる、この3rd language性を、新たなコミュニケーションとして、自分の中に取り込めるのではないか、そのように先生は考えている。つまり、新たなコミュニケーションが自分の中に生み出されるのである。そして、それによって今まで分かり合えなかった相手と分かり合えるかもしれないのだ。

この3rd language性の是非を考えていくのではなく、それ自体がどうなっているかを記述的に見ていくことの方が重要だと、野原先生はいう。人間のコミュニケーションがどうなっているかを理解することで、コミュニケーションそのものの姿を理解することができるのだ。ここに翻訳の面白さ・価値があるという。

## 物事を自分ごと化できる人に

最後に、先生がどのような思いをもって研究をしているか、どのような学生を求めているのかについて触れていく。

### ■ 研究理念

言語に関する研究を長年やってきた結果、言語の限界を知った。過去には、言語が全てを解決すると思っていたときもあった。しかし、ロジックをあきらめるのではなく、ロジックの違う出し方は何なのか、言語にはない他のものにあるのではないか。そういう問いがあるからこそ、デザイナーやアーティスト様々なバックグラウンドを持った人を連れてきて、その人は、どういう風に自分のロジックを料理しているのかを見ているそうだ。

## 求める学生像

東工大では、直接的に、翻訳を学ぶ機会は少ない。そのため、研究室にいる学生は、自分の専攻とコミュニケーションを掛け合わせて研究している人が多い。掛け合わせるときにキーとなるのが、学問の融合であるが、このとき、学問の連続性という認識が重要だという。学問はどこまで行っても学問であり、自分のやってきたことを抽象化して自分ごとにできているかどうかである。例えば、機械系にいる学生であれば、機械を学んできたのだということが重要なのではなく、「こういう方法・材料・分析が必要で、そのためにこういうことをしないといけない、この考え方は、言語学のこういうところに活かせるな」というように思考をスライドできる学生を、野原先生は求めているそうだ。それに加えて、自分の中で体験・物事を抽象化・法則化することが重要視している。先生自身、話すときにどういう風に自分の言葉が受け取られているのかを、仮説をたて法則化していくプロセスを意識しているという。

この二つを何度も往復して考えられる人が、自分の専攻と異なる分野に進んでも、それらを融合できる人だという。

## 今担当している授業

最後に担当している授業のいくつかを、紹介する。

### ・コンセプトデザインング

2単位の演習形式の授業で、武蔵野美術大学と合同で行う。出される1つのお題をもとに、東工大生と武蔵美生が混ざった合同チームごとに話し合いをして、コンセプトを作り、そのコンセプトを、何等かの造形物に表現するという授業。

### ・メディア編集デザインング

2単位のワークショップ参加型授業。メディアを複合的にとらえ、そこから多面的な思考を構築するテクニックを「編集デザイン」という。それをフィールドワークを通して、実践的に身につけていく授業。

### ・融合技術概論

1単位のオムニバス形式で、多方面からの専門家がきてレクチャーする形式。異分野のそれぞれの良いところを補完し、融合するためには、コミュニケーションが必要であり、その方法論を体系的に学ぶことができる授業。

### 執筆者より

この記事を読んでいただいた皆様、本当にありがとうございます。今回記事を書くにあたり、お忙しい中協力していただいた野原佳代子先生並びに秘書の鹿取弥生さん、教務支援員の開めぐみさんに感謝申し上げます。

また、2018年のVISA社協賛の合同ワークショップへの参加も快く承諾してくださりありがとうございます。実際の異分野間のコミュニケーションの現場を経験するとともに、自分の言いたいことを相手に伝える難しさ、相手の言っていることを理解するための互いのコミュニケーションのプロセスの難しさも実感しました。これを読んでいただいた皆様も、是非野原先生の授業や研究に少しでも興味を持っていただければ幸いです。本当にありがとうございました。

(近藤恭平)